
異世界興国大戦～疾風怒濤！！第一独立機動艦隊奮闘記～

天地銀河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界興国大戦〜疾風怒濤！！第一独立機動艦隊奮闘記〜

【Nコード】

N1937Y

【作者名】

天地銀河

【あらすじ】

二〇一四年、日中関係は悪化の一途をたどっていた。

二〇一五年、政権交代によって日本は憲法第九条を改正、陸上自衛隊は国防陸軍、海上自衛隊は国防海軍、航空自衛隊は国防空軍と名を変え活動を開始した。

二〇一六年、日本は中国との来るべき戦争に備えてある一つの計画を始動させた。その計画は『GFRP』……『連合艦隊復活計画』である。

二〇二五年、『GFRP』によって現代に蘇った新生連合艦隊は

神のイタズラか昭和一〇年にタイムスリップしてしまう。

そして新生連合艦隊は日本を破滅から救うため大日本帝国軍の一員として戦いに身を投じてゆく事を決意する。

果たして陰謀が渦巻く世界から日本を破滅から救えるのか？ご期待ください。

それとこの作品は未完結小説『蒼穹の艦隊〜第二独立機動艦隊出撃せよ〜』のリメイクバージョンです。

第一話 プロローグ

二〇一四年、日中関係は悪化の一途を辿っていた。解決する見込みのない尖閣諸島問題に中国の核開発及び急速な軍拡そして希少鉱物の輸出禁止等を行っていたからである。

二〇一五年、日本では成果を出せない民主党が自民党に総選挙で大敗、再び自民党が政権を握る事となった。

早速自民党は自衛隊を縛っていた憲法第九条を改正、自衛隊の軍拡を可能にさせたと同時に名前も変わり陸上自衛隊は『国防陸軍』、海上自衛隊は『国防海軍』、航空自衛隊は『国防空軍』となり活動を開始した。

二〇一六年、日本は中国の軍拡に対抗してとある一つの計画を打ちたてた。

その計画の名は『GFRP』グランド フ略さずに言つと『GRAND FRフ』リポート リバース EET REVERSE プロジェクト PROJECT』つまり『連合艦隊復活計画』である。

この計画は二〇一六年からおよそ八年の歳月をかけて日本の技術を総結集した最新鋭艦を建造する計画でありまさに日本の運命を左右する計画でもある。

後にこの計画が日本を…いや世界をそして歴史を大きく変えるとは誰も思わなかった。

第一話 プロローグ（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第二話 新しき仲間（前書き）

今回の話で登場する人物について分かる人にはわかる人物が登場します。皆、分かるかな？では、どうぞ。

第二話 新しき仲間

二〇二三年六月二十五日 日本国防海軍とある工廠の一角

「あの計画から既に七年……ついにここまで完成したか」

こう言うのはこの物語の主人公、紅蓮崎海斗大佐である。

「ええ、そうね海斗」

相槌を打ったのは姫崎桃華中佐である。

二人の目の前には鉄の城が鎮座していた。

この艦こそ『GFRP』によって建造された戦艦そのものである。

しかし、なぜ戦艦が存在しているのかと言うと現代になって対空武装が高性能化し、イージスシステム等の補助兵装も充実しているため、戦艦は戦艦同士の艦隊決戦で使用する艦では無く航空機を殲滅するための『洋上防空要塞』と言う新しい命を吹き込まれて君臨したのだった。

二人が見ている他にも後方のドックには数隻が突貫工事で建造されている。

そんな中、二人のもとに水兵がやって来た。

「紅蓮崎大佐、姫崎中佐、司令がお呼びです」

「了解した。行くぞ桃華」

「分かった、海斗」

呉国防海軍司令部

「紅蓮崎海斗大佐、入ります」

「同じく姫崎桃華中佐、入ります」

呉に有る国防海軍司令部の司令官が待つ指令室に二人は足を運んだ。

「どうぞ、入ってください」

二人が指令室に入ると部屋の中に司令官が居た。

「司令、用件とは何でしょうか？」

早速、紅蓮崎が聞いた。

「うむ、君達は例の計画を推進していたね」

「はい。この国を守るための計画ではありますが…それがどうしたのですか？」

「実は昨日、会議したのだ。そこで司令長官と参謀長を誰にするかと話し合われた結果、君達二人が適任だと上層部が判断したのだ」

「と、言う事は司令……」

「ああ、司令長官に紅蓮崎海斗、参謀長に姫崎桃華が任命されることが決定した。それに伴い階級も紅蓮崎海斗は二階級特進で海軍中将、姫崎桃華も二階級特進で海軍少将とする」

「「光荣であります、司令」」

二人は司令に敬礼した。

「それと君達の部下も紹介する。入ってくれ」

「「「「失礼します!!」」」」

司令室に入って来た五人。その五人に二人は啞然とした。取り敢えず数はいいとして五人全員うら若き美女達であるからだ。

「……取り敢えず自己紹介を頼む」

紅蓮崎がそう言うつと一番左の女性から順に前に出て自己紹介を始めた。

「私は吉祥寺紗奈海軍大佐であります。よろしくお願いします」

「私は西園寺華雄海軍中佐であります。今度ともよろしく」

「私は十六夜彩華海軍中佐であります。よろしく」

「私は神埼華凜海軍少佐でありましゆ。はわわっ!と、取り敢えずよろしくでしゆー!」

「私は東雲朱凜海軍少佐でありましゆ。あわわっ！と、とにかくよろしくでしゆ！」

「（最後の二人大丈夫か？）初めまして、紅蓮崎海斗海軍中将だ。五人ともこれからよろしくな」

「同じく初めまして姫崎桃華海軍少将です。皆さんよろしくね」

二人も自己紹介を行った。

「（しっかし、皆凄いな）」

紅蓮崎は五人をゆっくりと見回した。特に紅蓮崎を釘づけにしたのは吉祥寺、西園寺、十六夜の破格と言える巨乳である。ちなみに姫崎もかなり巨乳で神崎と東雲も捨てがたい（？）胸の持ち主だが、とにかく紅蓮崎は誰にも分からない程小さくニヤリとした。

「では自己紹介が終わった所で早速だが君達に任務を与える」

司令官がそう言うと七人はすぐに気をつけの姿勢を取った。

「君達にはとある新鋭艦の視察を命じる。場所は横須賀だ」

「ハッ、分かりました司令官。では、早速向かいます」

「うむ、では帰ってよし」

「……………失礼しましたッ！！……………」

第二話 新しき仲間（後書き）

本日、午後七時三〇分より作者は山岳部の合宿により六日まで投稿が出来ませんが、第三話については予約投稿で五日の午前零時に投稿するように設定させています。では、ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第三話 新鋭戦艦と艦魂（前書き）

一部変更しました。

第三話 新鋭戦艦と艦魂

横須賀造船所の一角にある秘密ドック

七人が横須賀に有るドックの前に到着すると、向こうから誰かがやって来た。

「これはこれは紅蓮崎総帥殿ではありませんか」

この発言に本人と姫崎を除いた五人が驚いた。

「総帥って長官……」

「ええーッ！」

「驚きです長官……」

「はわわ（あわわ）！ ！ ！ どういう事なのでしゅか！ ！ ！」

「総帥と呼ぶのは止めてくれと言っているではないか天龍寺てんりゆうじ」

彼の名前は天龍寺てんりゆうじ慶介である。なぜ紅蓮崎の事を総帥と言うのかと言つと紅蓮崎は何とこの日本の造船業を一手に担う『GHI』つまり『紅蓮崎重工業』の後継者であり次期総帥でもあるからである。だが、当の本人は家を継ぐ気は無く日本国防海軍、元海上自衛隊に入隊するかどうかで親と喧嘩、家を出て行ってまで国防海軍に入隊したのである。しかし親とは絶縁状態になった訳ではないので紅蓮崎重工業の後継者と言つ影響力は無くなつていないため皆からは次期総帥にもかかわらず総帥と呼ばれているのである。ちなみに天龍

寺は紅蓮崎の同期兼執事で階級は海軍少佐。

「しかしですね次期総帥とはいえその影響力は多大な物ですから…」

「まあいい。それよりこいつの説明をしてくれ」

紅蓮崎がそう言うと天龍寺は早速説明を始めた。この機会にこの新型戦艦の性能表を出しておく。以下の通り。

信濃^{しなの}型戦艦

全長 435m

全幅 55m

基準排水量 12万4500トン

満載排水量 20万8900トン

最大速度 55ノット

航続距離 ほぼ無限大

機関出力 35万5000馬力

武装 80式50口径61cm3連装陽電磁破城砲4基12門

80式50口径41cm3連装陽電磁破城砲2基6門

80式70口径155mm連装速射両用砲12基24門

80式36連装近接防空ミサイルランチャー8基

80式40mm単装CIWS24基

80式MK64VLS250セル

航空機 V-22C型4機

F-35C型12機

CH-60K型4機

姉妹艦 二番艦『播磨^{はりま}』、三番艦『紀伊^{きい}』、四番艦『駿河^{すまが}』、五番艦『水戸^{みと}』、六番艦『尾張^{おわり}』

説明

日本国防海軍及び紅蓮崎重工業が合同で『GFRP』によって秘密裏に建造した戦艦であり同時に航空母艦を航空機から守る盾として君臨している。

この戦艦の機関部には世界初の核に代わる新型機関『プラズマジェット機関』を採用している。この機関によって核以上の発電量を起こし尚且つ原子力機関では必ず出る使用済み核燃料を全く出さなため環境にも優しくしかも燃料はプラズマ粒子を使用するためほぼ無限大に動ける。ちなみに予備用としてガスタービン機関を6基備えている。

武装面ではプラズマジェット機関により無限大と言えるエネルギーをコンデンサーで電圧調整する事で『陽電磁破城砲』別名『プラズマビームキャノン砲』を発射できる。これは最大射程距離150キロ、威力は150キロ地点で装甲650ミリを撃ち抜く事が可能で、つまりこの主砲に耐えきれぬ装甲は地球上には存在しない。

機器面では『イージスシステム』を日本独自に改良した『ネオイージスシステム』を搭載し、それと連動し多数の敵を葬るためのシステムとして『ハイマツトフルバーストシステム』をも搭載している。このシステムは半径250キロ先の敵を最大250機までロックオン可能、そしてミサイルで殲滅する仕組みである。

「信濃か……前世では『アーチャーフィッシュ』に撃沈された不幸艦……だが、今度は違う。本来の姿に生まれ変わり日本を守る盾にして剣にもなる……気に入ったぜ」

紅蓮崎は周囲を気にせずまるで歌いあげるかのように言った。

「どうしたのですか長官は？」

思わず吉祥寺が姫崎にこっさり聞いた。

「海斗は時々あんな風になる時があるの。理由は私にも分からないの」

吉祥寺の疑問にある程度は答えた姫崎。この疑問は後々分かる事になる。

「では皆様、こちらへ」

天龍寺は七人を艦内へと案内した。

戦艦『信濃』 艦橋

「しかし、広いなー。さすがは戦艦だな。護衛艦とはケタ違いだ」

紅蓮崎は周囲を見回しながらそう言った。

「うんうん。それに見て見て、最新鋭の機器ばかりだよ」

『信濃』の艦橋は日本の持てる全ての技術を集結して造られている電子機器等で占めている。何よりも艦橋の窓から見える80式50口径61cm3連装陽電磁破城砲2基と80式50口径41cm3連装陽電磁破城砲1基は数年前の海上自衛隊時代では全く考えられない光景でもある。

すると、紅蓮崎はあるものを見た後、目を擦ってもう一回見た。

なぜなら、一番主砲塔の上に一人の少女らしき人物が立っていた

からである。

そして紅蓮崎は艦橋を飛び出し一番主砲塔へと向かった。

「あつ、海斗！待って〜！」

「長官！参謀長！……しょうがない、皆、行くよ！」

「おう、了解だ！」

「任せて！」

「はわわ！（あわわ！）ま、待ってでしゅ！」

「あつ、ちよつと総帥殿！」

同艦 一番主砲塔付近

「はあ、はあ、はあ、やっと着いた……」

ダッシュで一番主砲塔付近に到着した紅蓮崎は早速梯子を伝って砲塔上部へと登った。

「おい！そこで何をしているー！」

砲塔上部に到着した紅蓮崎は目の前の少女に言った。

すると、その少女はこちらに振り向いた。見た目は一五歳〜一六歳の少女で髪は黒く、肩のあたりまでまっすぐに伸びており身長は

大体一六〇cm位であろう。その少女は口を開いた。

「あの……私の事が見えるのですか？」

一瞬、何の事だと思えたほどだった。見えるも何も目の前に居るのだからと紅蓮崎は思った。

「やっと着いた〜！、あれ？海斗は？」

紅蓮崎の後を追っていた姫崎たちがやっと到着した。

「桃華、俺ならここに居るぞ」

紅蓮崎は下に居る姫崎たちにそう呼びかけた。

「うん、分かった海斗」

そう返事すると梯子で登り始め、五分後には全員が登り終えた。

「で、お前は一体何者だ？」

「私はこの戦艦の艦魂『信濃』です」

「マジかよー！」

「えっ！艦魂ですか!？」

「ええ、私は艦魂です」

信濃と言った少女は毅然とした態度でそう言った。

「おい、全員集合だ」

紅蓮崎は思わず全員を集めさせた。

「どうする？艦魂って信じられるか？」

「しかし目の前に居るのでしょうか。それに体が微妙に透けているし」「吉祥寺がまともな返答を返した。

「おいおい、それはマンガや小説の話だけだろ」

「では西園寺。目の前には本物の艦魂が居るのだぞ。どう考えても」「十六夜が西園寺の考えに反論してきた。

「そ、それなら何か証拠を出してくればよいのではないのでしょうか？」

「わ、私も同意見です」

神崎と東雲がオドオドしながらも意見を言った。

「それはいいな。採用だ。では、善は急げって言うし」

そう言つと紅蓮崎は信濃にこう言った。

「では信濃。何か艦魂だって言う証拠を見せてくれ」

「分かりました。では……」

そう言うと急に目の前が光り出し、そしてとある場所に到着した。

「お、おい！ここはさっき来た艦橋じゃないのか！？」

何と全員艦橋に到着したのだった。信濃を見るとどうだ、と言わんばかりに胸を張った。

「海斗、これは……」

「ああ、本当に信濃が艦魂である事を認めるよ」

「分かればいいのです皆さん」

これが艦魂との出会いだった。

第三話 新鋭戦艦と艦魂（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第四話 進みゆく計画

七月一五日 神戸紅蓮崎重工業本社

日本の造船業の実に八割を占めている日本最大の大企業紅蓮崎重工業の一角に有る社長室に紅蓮崎海斗は呼ばれた。

「失礼します。紅蓮崎海斗入ります」

「海斗か……入れ」

社長室に入ると社長席にはサングラスをして某司令の真似をして待つている人が居た。この人こそ紅蓮崎重工業現総帥である紅蓮崎刹那本人である。

「……親父、何の真似だ」

「それはいくら何でも酷いだろ、全く……」

「で、何の用だ？」

渾身のモノマネを軽くスルーすると早速用件を聞いた。

「早速だが、これを見てくれ」

そう言つとUSBメモリをパソコンに差し込むとクルリとさせて見る様に催促した。

「これは……航空母艦では無いのか!?それに巡洋艦も!?!」

パソコンには最新型の航空母艦と巡洋艦の3D画像と詳細なデータが記載されていた。

「どつだ。これら全て国防海軍とこの会社が建造しているのだぞ」

「フツ、さすがだな親父」

「」で二〇二三年七月一五日現在に建造している艦艇の一部を紹介させておく。以下の通り。

翔龍型航空母艦 しょうりゅうがま

全長 465 m

全幅 105 m

基準排水量 8万4500トン

満載排水量 12万3300トン

最大速度 55ノット

航続距離 ほぼ無限大

機関出力 35万5000馬力

武装 80式70口径155mm連装速射両用砲4基8門

80式4連装艦対艦ミサイル発射装置4基

80式16連装艦対空ミサイル発射装置4基

80式36連装近接防空ミサイルランチャー8基

80式40mm単装CIWS24基

航空機 最大135機

カタパルト 4基

エレベーター 4基(25m×25m四方)

サイドエレベーター 2基(25m×25m四方)

姉妹艦 一番艦『瑞龍』、二番艦『剣龍』、四番艦『轟龍』、五番艦『燐龍』、六番艦『翼龍』、七番艦『光龍』、八番艦『電龍』

吉野型巡洋戦艦

全長 285 m

全幅 35 m

基準排水量 3万5400トン

満載排水量 6万7500トン

最大速度 60ノット

航続距離 18ノットで1万3000海里

機関出力 15万5000馬力

武装 80式70口径30.5cm3連装電磁投射砲5基15門

80式70口径155mm連装速射両用砲12基24門

80式4連装艦対艦ミサイル発射装置4基

80式16連装艦対空ミサイル発射装置8基

80式36連装近接防空ミサイルランチャー8基

80式4連装魚雷発射管4基

80式40mm単装CIWS24基

80式MK64VLS250セル

航空機 V-22C型2機

F-35B型8機

CH-60K型4機

姉妹艦 二番艦『吉井』、三番艦『小瀬』、四番艦『成羽』、五番艦『釧路』、六番艦『嘉瀬』、七番艦『矢部』、八番艦『高津』

春風型ヘリコプター搭載イージス艦

全長 175 m

全幅 22 m

基準排水量 7200トン

満載排水量 8500トン

最大速度 85ノット

航続距離 ほぼ無限大

機関出力 35万5000馬力

武装 80式70口径155mm連装速射両用砲2基4門

80式4連装艦対艦ミサイル発射装置4基

80式16連装艦対空ミサイル発射装置4基

80式36連装近接防空ミサイルランチャー2基

80式4連装魚雷発射管4基

80式40mm単装CIWS8基

80式MK64VLS120セル

航空機 CH-60K型4機

姉妹艦

二番艦『夏風』なつかぜ

、三番艦『秋風』あきかぜ

、四番艦『冬風』ふゆかぜ

以下多数

「フッフッフ、驚くのはまだ早いぞ」

「今度は何だ？」

「まあまあ、ついてくれば分かる」

そう言つと立ちあがり、とある場所へと案内した。

同社 航空機研究所

本社の一角に有る航空機研究所に到着した二人の目の前には3機種
種の戦闘機が鎮座していた。

「こ、これはユーロスタータイフーン!?それにF-35ライトニング?!!?そしてF-2!?!?」

ここで一つ、F-Xにおいて航空自衛隊はユーロスタータイフーンを次期主力戦闘機に選択したのだった。もちろん、F-35を押ししていたアメリカの反発があったがここで航空自衛隊はF-35を研究用に5機アメリカから受け取りステルス性能を中心に徹底的に研究、そしてこのF-35も次期主力戦闘機としてアメリカにライセンス生産を受諾させることに成功したため異例の2機種同時採用となった。

「どうだ、驚いたか」

「これは驚くわ!なぜここに!……まさか」

「その通りだ。建造中の航空母艦に艦載する予定だ」

「最初の2機種は分かるが最後は何だ?F-2に似ているが何かF-22に似ているな」

一番右に鎮座している機体はF-2と同じスカイブルーカラーだが、よく見ると水平尾翼は2枚で、ハードポイントの場所も違う、何より見た目がF-22にそっくりである。

「よく気づいたな。こいつはFB-22ストライククラプターをベースにF-2の技術を盛り込んだ、その名もF-3だ」

「F-3……」

「しかもF-22のステルス性能をそのまま受け継ぎ尚且つ空対空ミサイルだと8発、空対艦ミサイルでも6発を積み込める程のハードポイントシステムを備えているからな。どうだ気にいったか？」

「ああ、最高だ。さすが親父」

「いやいや日本を守るためならこれ位やらないと。それでこれからどうするんだ？」

「取り敢えず仕事があるから帰る」

「また来いよ。今度は彼女達を連れて来てもいいぞ」

「ッ！？何を言っているんだ親父！？」

「ハハハッ、美女達相手にウハウハしているクセにか？」

「ッ／＼！帰るッ！」

第四話 進みゆく計画（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第五話 戦艦信濃復活セリ

一〇月二十五日 横須賀造船所秘密ドック

横須賀造船所秘密ドックより戦艦信濃が初めて外洋航海を行うためドックから出港しようとしていた。

戦艦信濃 艦橋

「吉祥寺艦長、西園寺副長、出港準備は出来ているか？」

「ハッ、既に完了しています長官」

「こつちも準備が完了しているぜ」

「そうか。では、出港せよ」

「了解。出港用意、舳い放てー！ーッ！」

「両舷前進微速！」

「了解。両舷前進微速！」

信濃の船体後方部からプラズマジェット機関独特の機械音が響き、信濃は誰にも見送られる事も無くひっそりと出港していった。

「護衛艦はたかぜ、しまかぜ、ゆうばり、ゆうべつ合流しまーす！」

数十分後、信濃の護衛のため護衛艦はたかぜ、しまかぜ、ゆうば

り、ゆうべつが合流した。

「よーそろー、このまま速度を維持せよ」

「では、艦長、ここを頼むぞ」

「長官、どこに行くのですか？」

「CICに向かって来る。何かあったらCICに連絡してくれ」

「分かりました長官」

同艦 CIC

「失礼するぞ」

「こ、これは長官殿！？全員、敬礼！」

紅蓮崎がCICに入るとこれに気付いた士官が他の水兵士官に敬礼を促した。

「いや、いい。自分の持ち場に戻ってくれ」

紅蓮崎がそう言うとCICのクルー達は自分の持ち場に戻って仕事を再開した。

「おや？これはこれは長官殿ではございませんか？」

紅蓮崎がCICを見まわっていると砲術長を務めている十六夜が

やって来た。

「十六夜か。まあ、ちょっとな。それよりどうだ新システムとか？」

「さすがは日本の技術を総力した電子機器や射撃システムですね。あのアメリカですら持ち合わせていないネオイージシステムにハイマツトフルバーストシステムはまさに日本の象徴も言ってもいい程です」

十六夜は自信を持って胸を張って言ったと同時に巨乳も少し揺れた。紅蓮崎はその様子に思わず釘づけになってしまった。もちろん、十六夜はそれを見逃す訳は無かった。

「おやおや長官殿？今、私の胸元を見ていましたね？」

「ば、馬鹿。そんな訳……」

紅蓮崎が反論する前に十六夜は紅蓮崎に近づき耳元でこう言った。

「フフフツ、私は夜の間ならいつでも準備は出来ていますよ長官殿」

そう言つと十六夜は自分の持ち場に戻った。

「何なんだったのは今のは？」

一瞬、呆然となったがハツとなると、すぐにCICを出た時だった。

「ねえ、海斗」

「どうしたんだ桃華……!!」

紅蓮崎は思わず驚いた。なぜなら姫崎が目の前に居て表情こそ笑顔であるものの、どこか怒りのオーラをまとっていた。

「先程の会話を全部聞いていたの十六夜砲雷長との会話」

「いや! 待て! それは、その」

姫崎は無視して紅蓮崎の耳元でこう言った。

「今夜、私の部屋に来てください海斗」

そう言うと逃げる様にその場から離れた。その時、一瞬だが姫崎の顔が真っ赤だった。

「お、おい! 桃華! ……なぜに、こうなった……」

通路に只一人紅蓮崎が取り残されたかのようにポツンとなった。

「あっ、総帥殿!」

通路の先から天龍寺がやって来た。

「どうした天龍寺」

「そろそろ艦橋に戻ってくださいとの吉祥寺艦長からの伝言です」

「分かった。今すぐ戻る」

同艦 艦橋

「遅いです長官」

「悪い。遅れてしまつて」

「長官、そろそろ父島に到着します」

そう言うのは信濃航海長を務めている九条理沙少佐である。

「そうか。では父島に到着したらチェックテストを行う」

『了解ッ！！』

そして30分後、信濃以下4隻は父島に到着した。

「これより信濃は性能チェックテストを行う。各員の健闘に期待する」

これを合図に信濃では数時間に渡り各部のチェックテストが行われた。そして数時間後、辺りが暗闇に覆われた頃に最後のチェック項目を残して後は全て異常が無かった。

「よし、異常が無かった……問題は陽電磁破城砲だが、砲雷長頼みます」

「任せてください長官殿。良い戦果を期待して下さい」

無線電話で十六夜はそう言うと部下に発射命令を下した。

「陽電磁破城砲発射用意」

「了解。コンデンサー起動！」

「粒子エネルギーをアルファ回路に接続！」

「対電磁破フィールド展開！」

「主砲旋回。左60度、距離3万6000メートル、目標曳航ブイ」

プラズマジエツト機関から来る豊富な電力をコンデンサーで電圧調整し、いつでも発射できるように準備した。

「砲雷長。発射準備が出来ました。いつでも発射できます」

「ふむ、了解した」

そう言つと十六夜は発射命令を下した。

「目標、曳航ブイ。主砲、副砲一斉射撃：発射ッ！」

カッ！バシューーーーン！バシューーーーン！バシューーーーン！
バシューーーーン！

信濃の主砲12門、副砲6門の計18門の陽電磁破城砲が青白い光を発し一瞬だが、周囲がまるで昼になったかの様に明るくなった。

そしてCICのモニターには陽電磁破城砲の進路を示す青い線が
どンドン赤い点の曳航ブイに接近し、そして赤い点と青い線が一緒

になった瞬間、曳航ブイの存在が消えたのか赤い点が消えた。

この瞬間、CIC、艦橋問わずに観喜に充ち溢れた。誰もが信濃の、いや戦艦の復活を喜んだ。

「成功です長官！」

「よっしゃー！やったぜー！」

「やったね海斗」

吉祥寺と西園寺は互いに興奮しながらも喜び合い、姫崎は思わず紅蓮崎に抱きついた。

「ああ、これで国防海軍、いや日本国は安泰だ……総員、これより横須賀に帰還する。両舷前進全速！」

戦艦信濃以下4隻は無事に横須賀国防海軍基地に帰還した。ちなみにあの後、十六夜と姫崎を抱きながら就寝したのはまたの話。

第五話 戦艦信濃復活セリ（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第六話 裏切りそして……（前書き）

今回は諸事情により時系列を一年飛ばします。それとこの話の元ネタは『蒼穹の艦隊』です。悪しからず。

第六話 裏切りそして……

二〇二五年五月十二日 父島沖

秘匿艦隊のおなじみの場所として存在する父島の沖合には『GF RP』において建造された艦艇が集合していた。その戦力は現在、アメリカ海軍が保有する空母打撃群よりもはるかに多く、技術力もアメリカ軍が実用化していない技術が満載しているまさに現代日本の技術の粋を結集させ、現代に蘇った連合艦隊そのものである。戦力としては以下の通り。

戦艦：『信濃』 『播磨』 『紀伊』 『駿河』 『水戸』 『尾張』

航空母艦：『翔龍』 『瑞龍』 『剣龍』 『轟龍』 『燐龍』 『翼龍』 『光龍』 『電龍』

巡洋戦艦：『吉野』 『吉井』 『小瀬』 『成羽』 『釧路』 『嘉瀬』 『矢部』 『高津』

イージス艦：『春風』 『夏風』 『秋風』 『冬風』 『凧風』 『連風』 『咲風』 『突風』 『剣風』 『時風』 『新風』 『松風』

補給艦：『渥美』 『糸島』 『宇土』 『絵柄』 『大浦』 『大崎』

輸送艦：『宗谷』 『積丹』 『襟裳』 『白神』 『大間』 『龍飛』 『入道』 『野島』

揚陸艦：『芦ノ湖』 『油ヶ淵』 『池ノ内』 『伊自良』 『猪苗代』 『小川原』

戦艦信濃 艦橋

「壮大だなこの光景は」

「ええそつだね海斗」

艦橋の窓越しから集結した艦隊を見降ろす紅蓮崎と姫崎。特に現代には存在しなくなった戦艦と巡洋戦艦に日本初の航空母艦等大日本帝国海軍の再来と言える程である。

「長官。全艦、出港準備が整ったとの連絡が入りました」

吉祥寺が報告してきた。

「そうか。では、新生連合艦隊出港せよ！」

『了解ッ！』

最初に第一航空戦隊の『翔龍』『瑞龍』『剣龍』『轟龍』、第二航空戦隊の『燐龍』『翼龍』『光龍』『電龍』、続いて第三戦隊の『吉野』『吉井』『小瀬』『成羽』、第四戦隊の『釧路』『嘉瀬』『矢部』『高津』が出港していった。

「続いて第一戦隊、第二戦隊出港！」

「了解。抜錨、続いて両舷前進、速度第二戦速」

そして、第一戦隊の『信濃』『播磨』『紀伊』、第二戦隊の『駿

河』『水戸』『尾張』も出港していった。

第一補給戦隊旗艦渥美 艦橋

補給艦渥美の艦橋には戦線復帰した紅蓮崎刹那本人が居た。ちなみに階級は海軍少将で補給戦隊司令を務めている。

「ようやくこの時が来たか……長かったな」

刹那は進みゆく新生連合艦隊を見て呟いた。彼はこの新生連合艦隊の誕生を誰よりも喜び、そして息子である海斗本人が司令長官と言う立派な役職に着いている。それだけでも喜ばしいが、立派になった息子の元で再び仕事ができる。まさに父親として育てた甲斐があつた時であるからだ。

三日後、五月一五日マリアナ沖

新生連合艦隊はあの悲惨なマリアナ沖海戦の場所ともなったマリアナ沖合に到着した。

「全艦艇、機関停止」

「了解。機関停止を各艦艇に連絡します」

無線で機関停止の連絡を受けた各艦艇は順次、停止した。

「マリアナ沖海戦で散った多くの英霊達に黙とうーッ！」

「……………」

紅蓮崎が全艦隊に無線で呼び掛けると、自ら気をつけの姿勢を取った。全員、背筋を伸ばし、胸に手を当てて黙とうした。もちろん、この戦艦に宿る艦魂信濃も胸に手を当てて黙とうした。

同海域深度350メートル地点

アメリカ海軍原子力潜水艦ユナイテッド・ステーツ

「コマンダー、見つけました。NEW GRAND FREETです」

「見つけたか。ジャップめ、こんな艦隊を建造して」

ユナイテッド・ステーツの発令所でレイ・ブラッド艦長は侮蔑の言葉を発した。元々、彼は日本が憲法を改正してからの急速な軍拡をいち早く警戒し、上層部に報告したが、上層部は日本を警戒するどころか日本を中国の防波堤として使えると考えており、そのためほぼ機密と言われているF-22の派生版であるFB-22ストライクラプターやF-35ライトニング？を日本にライセンス生産したりと日本を支援していたのだ。その上層部の行為は狂信と言える愛国心を持つレイ・ブラッドをかなり傷つけた。日本はあのまま平和主義を持っていい、いずれアメリカの脅威になる、何よりもエリート思考を持つ彼は日本人を毛嫌いしていた。そのため自分と同じ思想を持つ同志を連れて最新鋭原子力潜水艦ユナイテッド・ステーツを奪取、そして今に至る。

「艦長。巡航ミサイルの発射が完了しました。後は艦長の指示次第

です」

「ではジャップ共に裁きの鉄槌を！全弾発射ッ！！」

シュバーーーーン！シュバーーーーン！シュバーーーーン！シュバ
ーーーーン！

ユナイデット・ステーツが持つ二十四個の水中発射セルからトラ
イデント？巡航ミサイルが放たれた。

新生連合艦隊総旗艦信濃 CIC

「！？艦橋よりこちらCIC！方向三時、距離三十二キロ、数二十
四！あつ、こ、これは！じゅ、巡航ミサイルです！！」

この報告は艦橋を騒然とさせた。そして紅蓮崎は驚愕しながらも
即座に指示を飛ばした。

「な、何だと！？げ、迎撃用意！ネオイージスシステム及びハイマ
ットフルバーストシステムスタンバイ！」

「りよ、了解！」

「続いて各艦艇に機関出力最大を！」

「了解！」

同艦 CIC

「後、どれ位で巡航ミサイルがこの艦隊に到達するのだ」

「はっ、艦隊上空に到達するまで後一〇分、爆風等も計算に含めますと最低でも後、七分後には到達します！」

「くっ！米軍め！対空ミサイルの装填状況は！」

十六夜は歯ぎしりしながらも対空ミサイルの状況を聞いた。

「後一分で完了します」

「砲雷長、ネオイージスシステムが二十四発の巡航ミサイルをロックオンしました」

「そうか。装填完了次第スタンダードミサイルを発射する」

その時、通信士が最悪ともいえる報告をしてきた。

「レーダーに反応！……方向四時！距離三十二キロ！数二十四！巡航ミサイルですッ……！」

「な、何ですって……！」

「イージス艦春風、夏風からスタンダードミサイル発射されました！」

「続いて秋風、冬風がアスロックを発射！」

次々と報告が入って来る。その中で十六夜は疑問に思った。アスロックとはどういう事だ、と。秋風、冬風は第一波の巡航ミサイル

が発射された時に一番最初に動いた艦艇であり、二隻のレーダーには巡航ミサイルが海面から放たれたのを捉えていた。そのため二隻はガスタービンエンジンを一杯起動させ、時速85ノット言う驚異の速度でどんどんとユナイデッド・ステーツを追い、そしてソナーが捉えた瞬間アスロツクを発射したという事である。

ユナイデッド・ステーツ 発令所

「艦長！ジャップのイージス艦からアスロツクが！」

「チツ、アンチデコイ魚雷発射！」

バシユン！バシユン！バシユン！バシユン！バシユン！バシユン！

艦首の533ミリ魚雷発射管から六発のアンチデコイ魚雷が放たれ、そしてアスロツクに六発直撃した。

「やりました艦長！全弾命中です！」

「どうだ見たかジャップ共！」

しかし、ソナー員が悲鳴のような報告をした。

「す、水泡からアスロツクが！！」

次の瞬間、二発のアスロツクがユナイデッド・ステーツに直撃。ユナイデッド・ステーツの船体を引き裂き、マリアナ海峡の奥底へと沈み始めた。まるで冥界の王から手招きされるが如く。

巡航ミサイルを発射した張本人であるユナイテッド・ステーツを轟沈させたが、その巡航ミサイルは第一波の二十四発と第二波の二十四発の合計四十八発であり、四十八発のうち春風、夏風から放たれたスタンダードミサイルにより十二発が迎撃され残り三十六発となっている。その三十六発はどんどん新生連合艦隊に近づいて行った。

戦艦信濃 艦橋

「長官。秋風、冬風より『我、敵原子力潜水艦ヲ撃沈ス』との事です」

「そうか。で、巡航ミサイルの迎撃状況は？」

吉祥寺は秋風、冬風より入った電報を読み上げると、紅蓮崎は巡航ミサイルの事について聞いた。

「今の所、各艦艇が迎撃していますので。報告では残り十四発となっております」

「なるべく急ぐようにな」

バタンツ！

すると扉が急に開き、艦橋に居た全員が扉の方を向くとそこには電報らしきものを持った神埼と東雲が居た。

「ど、どうしたの二人とも!？」

姫崎が二人に聞くと、電報を持っていた神崎が早口ながらも電報に書かれた内容を読み上げた。

「た、大変でしゅ！た、たった今！米軍が！」

「米軍がどうした！？」

またもや通信士が報告してきた。それも最悪の報告だった。

「長官！アメリカが！」

「何だと！……！」

紅蓮崎は振り向こうとした瞬間、目の前が真っ白になった……艦隊上空でアメリカ軍の巡航ミサイルが炸裂したからである……

第六話 裏切りそして……（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第七話 タイムスリップ（前書き）

今回の話は和泉祐司先生の『興国大戦1944』を参考にしました。悪しからず。

第七話 タイムスリップ

?????年???月???日

「……………んっ?うっ?ん?…と、桃華!」

艦橋内で目覚めた紅蓮崎は真っ先に桃華を抱き起こした。

「か、海斗……………皆は?」

「うっ、頭が痛い……………」

「何だったのだ今のは!？」

「はわわ(あわわ)!どうなっているのですか!？」

紅蓮崎が目覚めてから数秒後には艦橋に居た全員が目を覚ました。

「一体どうなっているの?」

「と、取り敢えず各部の状況は?」

「こちら機関室。異常無し」

「こちらCIC。異常無しです」

「こちら後部艦橋。異常無し」

聞いた所、各部、各システムに異常が全くと言ってもいい程無か

った。あれほどの威力を持つ巡航ミサイルの直撃にもかかわらず。

「そうか。各艦との連絡はどうなっている？」

「各艦とも無事だとの事です」

「長官、GPSからの信号を受信できません！」

「加え、呉の司令部との連絡が取れません！」

「な…GPSが受信できないだと……」

GPSは現代の航海で最も重要な装置の一つで自分の位置を知るための手段であり、それが使用不能となると精度の低い羅針盤などを使用するしか方法は無い。

「長官、各艦とも本艦と同じ状況で、GPS通信が不能との事です」

「そうか……これからどうする？」

すると、九条航海長が進言してきた。

「長官。ここは一旦、母港に戻るべきだと私は進言します」

「私も航海長の言葉を支持します」

吉祥寺も同意見の様だ。後は総司令官である紅蓮崎が決める訳だが…言うまでも無かった。

「分かった。これより一時、総司令部のある呉に帰還する。全艦隊、一八〇度回頭！」

「了解。一八〇度回頭！両舷前進全速！」

新生連合艦隊は取り敢えず呉へと進路を変更。念の為、イージス艦を周囲に展開させ輸形陣を取って航行を始めた。

数時間後、

「長官。日本国領海に到着しました」

「分かった。通信士、まだ呉の総司令部との連絡は取れないのか？」

「はい…何の応答もありません」

「北西より航空機接近！」

CICから連絡が入った。

「米軍機か？」

「いいえ、呼びかけに応じません」

「警戒態勢を取れ」

紅蓮崎は何かを察し、警戒を呼び掛けた。

「了解。対空戦闘配置につけ！」

吉祥寺が命令を下す。CICはSPYレーダーから来る情報を伝

えてきた。

「航空機三機編隊。いずれもプロペラ機の模様！」

各艦のCIWS及びシースパロー発射装置が北西方向に向けて構えた。

「あ、あれはぜ、零戦!？」

真つ先に西園寺が驚いたかのように声を上げた。

零戦らしき機体は信濃の軍艦旗を認めたのか、味方機だと知らせるように何度もバンクした。そして、高度を下げて風防を開け、周囲を旋回する。そして日本の方向へと立ち去って行った。

「ちょ、長官!あれはどう見ても零戦だよ!」

西園寺は驚きながらも強い口調で言った。

「まさか……俺達は過去の世界にタイムスリップしてしまったのか……」

紅蓮崎は信じられないと思ったが、すぐにその考えを取り除いた。目の前の現実を疑うほど紅蓮崎は愚かでは無い。

「ちょ、長官!レーダーに反応!前方に大型艦艇多数!」

「な、米軍か?」

「いいえ、違います。それに何の返答も返しません」

紅蓮崎がさつき察知した妙な感じはこう言う事だった。すぐさま指示を飛ばした。

「レーダー照合、急げ」

「了解……識別不明……待ってください、これは……」

「どうした？」

「あっ、映像に映します」

レーダー員は言うより見せた方が早いと考えたのか艦橋のモニターにその艦艇を見せた。

「こ、これは……」

「ほ、本当に日本軍艦艇なの!？」

モニターに映し出されたのは前方部に何と3連装砲塔2基を備えた戦艦である。それも後方にはそれと同様の艦艇が数隻映っていた。

「ま、待て!なぜ3連装砲塔が!」

西園寺の言う事は正しい。なぜなら日本海軍が3連装砲塔を採用したのは戦艦だけで大和、武蔵の2隻だけである。だが、モニターに移っているのは大和、武蔵に有らず、どちらかと言うと艦橋や風貌からして長門型に似ている。その長門型が進路を遮るように進路を取り始め、それに後方の戦艦群も同じ進路を取り始めた。

「ちよ、長官！前方の一番艦より発光信号。コチラ大日本帝国海軍所属戦艦長門。貴艦隊八大日本帝国ノ領海ヲ侵犯シテイル。速ヤ力ニ所属ヲ連絡サレタシ」との事です！」

「うっ、マズイ事になってきたぞ」

「長官、どうしますか？」

「と、とにかく正直に所属を答えるしかないだろう。発光信号用意！内容は以下の通りだ」

大日本帝国海軍戦艦長門 艦橋

「不明艦より発光信号。『コチラ八日本国国防海軍戦艦信濃』です」

「信濃だと？そんな名前の戦艦は我が海軍にはいないはずだぞ」

信濃ゆきしたかつみと言う戦艦の名前に疑問に思ったのは戦艦長門の艦長である雪下勝美海軍大佐である。

「それに国防海軍とは一体……」

「艦長。ここは彼らの艦艇を臨検すべきです」

副艦長が進言してきた。

「うむ、そうだな。内火艇準備！それと不明艦にこう発光信号を送れ」

戦艦信濃 艦橋

「戦艦長門より発光信号『停船セヨ』です」

「艦長。機関停止」

「了解。機関停止」

戦艦信濃は機関を停止し、信濃は惰性でゆっくりと前に動いていた。

戦艦長門 艦橋

「不明艦、機関停止しました」

「艦長。内火艇の準備が整いました」

「うむ。では、早速行くぞ」

長門より二隻の内火艇が信濃に向けて進み始めた。

戦艦信濃 艦橋

「長門より臨検隊が来ます」

「艦長、ラッタルを降ろしてくれ」

「了解しました」

「海斗どうするの?」

「さあ?俺にも分からない。只一つ分かる事はここは俺たちの知っている過去の日本では無い事だ」

「私達の知らない日本?それってもしかして並行世界パラレルワールドの事?」

「そうだな。おっと、彼らが到着する頃だな」

そう言つと紅蓮崎は立ちあがり、艦橋の扉の方へと歩み始めた。

「ちょ、長官。何処へ行くつもりですか」

「彼らを出迎えに甲板へ」

「そ、それなら私も」

「わ、私も」

「お、同じでしゅ」

結局、紅蓮崎についてきたのは姫崎、神埼、東雲と数名の水兵を引き連れて甲板へと向かった。

その頃、内火艇はようやく信濃に到着し、ラッタルによって信濃の甲板へと到着した。

「でかい……あの長門よりもデカイぞ」

「それに甲板はヤケにさっぱりしていますね」

水兵は数丁のガトリング機関砲に、数十の副砲を見て言った。

「誰か来ます」

水兵が指差した扉がキイッと開き、紅蓮崎たちが出てきた。

「ようこそ戦艦信濃へ。私はこの艦隊の司令長官、紅蓮崎海斗海軍中将です」

「同じく姫崎桃華海軍中将です」

「同じく神埼華凜海軍少佐です」

「同じく東雲朱凜海軍少佐です」

「なっ！？お、女だと！しかも海軍少将だと！」

驚くのも無理は無い。どれほど成績が優秀であろうと女性は軍人にはなれない。それが常識である。だが、彼の目の前には若くしかも海軍少将と云うかなりキャリアを積まないと成れない階級を目の前で女性は保有している。なによりもこの艦隊の司令長官は当時の日本人のイメージである短足短腕を覆させる程どちらかと言つと欧米人の標準的な体型をしている。

「事情は後ほど話します。それより貴官の官姓名は？」

「申し遅れました。私は大日本帝国海軍戦艦長門艦長の雪下勝美海

軍大佐である」

「早速ですがここで話するのはあれですからどうぞ艦内へ」

「うむ、了解した」

戦艦信濃 長官室

「ささ、どうぞこちらへ」

「失礼します」

「早速ですが雪下大佐殿。本日は何年何月何日ですか？」

「本日？何を言っている。今年は一九三五年五月一五日だが」

「……そうですか？」

「そう言う長官殿。あなた方は一体……」

「実は我々は八〇年後の未来、二〇二五年の日本から来ました」

「……ちょっと待て。どういう事だ」

「証拠ならたくさんあります。これを」

そう言つと机の下から太平洋戦争の事が事細かく記された歴史の本である。

「これは？」

「この本のしおりを中心にお読みください」

雪下大佐はその本を手に取り、ペラペラとページをめくり始めた。そして最後の方になると目じりに涙を浮かべ、最後には思わず涙をこぼしてしまった。

「……どうですか雪下艦長？」

「ああ、どうやら本当に君達は未来から見た。その事を信じよう」

「ありがとうございます」

「だが一つ。言っておきたい事がある」

雪下大佐は紅蓮崎たちが疑問に思っていた事を言った。

「この世界と君達の居た世界では全く歴史が違う事だ」

第七話 タイムスリップ（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第八話 明かされた真実

一九三五年五月一日 戦艦信濃 長官室

「雪下艦長。我々の知っている世界とこの世界はどういう風に違うのですか？」

「うむ。まずは日露戦争から話をしよう」

雪下艦長の口から話されたこの世界の歴史は紅蓮崎たちの居た世界とは全く違っていた。

日露戦争は事実通りに日本の勝利となった。決め手はあの日本海海戦である。この時の日本海海戦で日本海軍の戦力は事実では機雷事故で沈没した『八島』、『初瀬』は沈没せず、存在しているため日本海海戦で捕獲するはずである艦艇をも撃沈させ、文字通りロシア第二太平洋艦隊は殲滅された。

その後のポーツマス条約では事実では成し遂げられなかった賠償金を日本円にして十億円を手にする事が出来た。

一九〇五年、日本海軍は事実で建造された戦艦『薩摩』、『安芸』、『香取』、『鹿島』、巡洋戦艦『伊吹』、『鞍馬』、『筑波』、『生駒』は建造されず、代わりに河内級弩級戦艦『河内』、『摂津』、『志摩』、『和泉』の四隻が建造されていたのだ。性能はかなり変わっており50口径30.5cm連装主砲6基を中心軸に搭載しており、その姿は事実の伊勢型戦艦を小さくした艦容である。

一九〇九年、日本はさらなる発展を目指そうと超弩級戦艦を建造

しようとして計画した。

だが、当時の日本にはまだそんな高度な技術がないため、事実通りにイギリスのヴィッカーズ社に建造を依頼、そして一九一三年、最新鋭の超弩級巡洋戦艦が日本にやって来た。名前は事実通りに『金剛^{こうかう}』で、その設計図をもとに建造した姉妹艦の名前は二番艦から順番に『比叡^{ひえい}』、『榛名^{はるな}』、『霧島^{きりしま}』となった。

一九一四年、欧州でサラエボ事件が勃発、事実通り第一次世界大戦が勃発した。日本は日英同盟を理由に連合国側にたつてドイツ帝国に宣戦布告した。

同時にヨーロッパへ事実よりも大規模な兵力である三個師団と最精鋭超弩級巡洋戦艦である金剛型四隻を主力に河内型弩級戦艦四隻、天龍型軽巡洋艦二隻、神風型駆逐艦十二隻とする遣欧艦隊が結成された。

そして一九一六年六月一日、ジユットランド沖海戦が勃発、遣欧艦隊も参戦したのだ。結果は事実通りに連合国側が勝利したのだ。

少し違う点は轟沈するはずの『クイーン・メリー』が轟沈せず、さらにドイツ海軍の最新鋭戦艦『バイエルン』、『バーデン』の二隻が機関損傷している所を日本海軍が捕獲する等、日本海軍の参戦によって戦況に少なからず影響した。

その後、ドイツ海軍のUボートによる無差別潜水艦作戦によって連合国側の輸送船が片っ端から沈没されたが、事実よりも高性能なソナーを搭載した日本の護衛駆逐艦によって、輸送船団の損害は月々減って行った。

そしてツインメルマン電報事件や無差別潜水艦作戦に業を煮やし

たアメリカは四月六日にドイツに対し宣戦布告。

一方で、ロシアでは事実通りに三月革命が勃発。革命は成功し世界初の社会主義国家：ソビエト連邦が誕生したのだった。だが、ニコライ二世は銃殺したものの、皇女四姉妹はその彼女達が持つている莫大な資産と皇帝の遺産と共に行方をくらましたのだった。

そして九月一三日ドイツ帝国は降伏。こうして第一次世界大戦の幕を閉じたのであった。

その後のパリ講和会議ではドイツに事実とは違う内容のベルサイユ条約が締結された。内容は以下の通り。

- 1：ドイツの保有する全植民地は没収。
- 2：非武装地帯の設置及び徴兵の禁止。
- 3：賠償金は二十億マルクとする。
- 4：軍備の制限。海軍の排水量、保有数は事実通り。
- 5：ドイツは建造中のバイエルン型戦艦『ザクセン』、『ヴェルテンブルク』を日本に譲渡する。

大戦中、日本は世界初の16インチ主砲搭載戦艦である扶桑型超弩級戦艦『扶桑』、『山城』の二隻及び伊勢型超弩級戦艦『伊勢』、『日向』の二隻の合計四隻を建造した。事実では45口径36cm連装主砲6基12門だが、この世界では50口径41cm3連装主砲4基12門の超弩級戦艦として竣工した。その一年後には50口径46cm3連装主砲4基12門と言う世界の常識を超えた破格の性

能を誇る長門型戦艦『長門』、『陸奥』、『伊予』、『淡路』の四隻建造したのだった。もちろん世界には50口径41cm3連装4基12門搭載の戦艦として公表している。

そんな中、一九二一年、ワシントン軍縮条約が起こった。事実通り日本の八八艦隊の建造を辞めさせるべく行われ、様々な人の思想等もあり結果は米英比率対七割と言う事実よりもマシな数字となつて条約は成り立った。早速日本は建造中の天城型巡洋戦艦『天城』、『赤城』と加賀型戦艦『加賀』、『土佐』を当時補助艦艇扱いの航空母艦に改装、その他にも旧式艦化した富士型前弩級戦艦、敷島型前弩級戦艦、河内型弩級戦艦を予備役に回して行った。ちなみに日本が保有する事になった戦艦及び航空母艦は以下の通りである。

金剛型戦艦四隻：『金剛』、『比叡』、『榛名』、『霧島』
扶桑型戦艦二隻：『扶桑』、『山城』
伊勢型戦艦二隻：『伊勢』、『日向』
長門型戦艦四隻：『長門』、『陸奥』、『伊予』、『淡路』
大隅型戦艦四隻：『大隅』、『薩摩』、『豊前』、『豊後』
鳳翔型航空母艦一隻：『鳳翔』
龍驤型航空母艦四隻：『龍驤』、『神驤』、『天驤』、『蓮驤』
天城型航空母艦二隻：『天城』、『赤城』
加賀型航空母艦二隻：『加賀』、『土佐』

軍縮の影響により艦艇の保有数を制限された日本海軍は少ない排水量で高火力の艦艇を保有する小排水量高火力艦隊主義が台頭してきた。そこで参考にしたのがドイツ海軍のポケット戦艦ともいわれるドイツチュラント型装甲艦である。特に全面電気溶接による重量の軽量化と小排水量で28・3cm3連装主砲2基6門と言う高火力を有している。それにドイツの技術や工業製品等をあらゆる手段で日本は吸収したため日本海軍でも技術を成熟させれば小排水量で

高火力の艦艇を保有する事が出来る。そのため日本の技術者は血も滲む程の努力を積んでようやくその技術を成熟させた。早速日本海軍はこの技術を使い制限数に反しない艦艇を建造した。

例を出すと青葉型重巡洋艦と古鷹型重巡洋艦である。これも事実と違った性能を有しており、排水量1万トンで20.3cm連装主砲4基8門、50口径12.7cm連装高角砲6基12門、61cm4連装魚雷発射管2基と言う感じである。

第一次世界大戦で登場した飛行機、日本海軍はこれもまたドイツからの技術を元に高出力で高火力、旋回性にも優れた機体を作ろうと日夜努力した結果、三〇〇馬力で時速250km/h、7.7m機銃2門の性能を持つ一〇式艦上戦闘機が誕生した。ここから日本海軍は世界のレベルを上回る航空機を作り出す始まりの機体でもある。

一九三〇年、ロンドン海軍軍縮条約が行われた。これは世界各国がワシントン海軍軍縮条約において『主力艦艇』の大量建造を防いだに過ぎず、巡洋艦の大量建造を引き起こした。そこで三年前にお流れになったジュネーブ条約の失敗を反省し、新しく補助艦艇にも制限数を設けることになった。会議の結果、巡洋艦は米英比率対七割、潜水艦は米英比率対一〇割と言う日本優位の状況となった。

一九三一年、事実通りに満州事変が勃発、大満州帝国が誕生した。案の定アメリカ、中国が非難してきた。もちろんリットン調査団が派遣されたものの、日本軍の偽装は完璧であり『この鉄道爆破事件は中国共産党の仕業であり、日本軍の行った行為は正当防衛である』と証言、さらにこれに同調して世界各国が大満州帝国を容認したため、アメリカ、中国は反論できなくなった。

そして一九三一年から来るアメリカとの戦争に備え、軍拡を始めた。一九三四年、対空用にスウェーデンのボフォース社の40mm機関砲、フランスのホチキス社の25mm機関砲を元に改良した30mm機関砲をそれぞれライセンス生産で生産を行い、高角砲も八九式45口径12.7cm連装高角砲を改良した九四式50口径12.7cm連装高角砲を開発した。早速生産を始め、全艦艇にトツプヘビーにならない程度に搭載した。

航空機も最初にタイムスリップした時に零戦にそっくりだと言った機体は今年に採用された最新鋭の九五式艦上戦闘機である。性能は一一五〇馬力の高出力の発動機を積み、時速は505km/h、武装も機首九五式13.2mm機関銃2門（事実の二式13mm機関銃に相当）、翼内九五式20mm機関砲4門（事実の九九式20mm機関砲一号型に相当）と言う高火力を有し、防弾装甲においては発動機、コックピット、燃料タンクの周辺を中心に防弾装甲を張り巡らした、まさに走攻守の三拍子揃った世界最強に相応しい機体となっている。

艦上攻撃機、艦上爆撃機、艦上偵察機も今年採用されたばかりの最新鋭ばかりである。

九五式艦上攻撃機は一一五〇馬力エンジンに、速度395km/h、機首九五式13.2mm機関銃2門、後方旋回式九五式13.2mm機関銃1門、最大搭載量1トンである。

九五式艦上爆撃機は一一五〇馬力エンジンに、時速385km/h、機首九五式13.2mm機関銃2門、後方旋回式九五式13.2mm機関銃1門、最大搭載量は500キロである。

九五式艦上偵察機は一一五〇馬力エンジンに、速度435km/h、機首九五式13.2mm機関銃2門、後方旋回式九五式13.2mm機関銃1門、最大搭載量は500キロである。

上記の四機種は世界標準をいずれも超えた航空機である。特に一九三五年時に一一五〇馬力の発動機を作れるのも技術も積み重ねによって完成したもので、これが無いと上記の四機種の性能はガタ落ちであると言われる程である。

「と、言うのがこの世界の歴史だ」

「あり得ない…我々の居た世界とは違う道を進んでいる」

紅蓮崎はこの世界の歴史に驚きを隠せない。特に事実では世界から孤立していた日本だが、この世界では孤立しておらず、技術も世界を大きく離れている程進んでいる。敢えて言うならこの世界の日本の技術は一九四一年並みである。

「それで、これから君達はどうするのかね？」

「自分としてはこの世界の日本国の国民を自分達の居た世界の二の舞にさせないために共に戦いたいのですが…兵士達の事もありますので」

紅蓮崎本人としてはあの悲劇をこの世界の日本国民に同じ事を味わらせたくないと考えている。事情を話せば兵士達も納得するであろう。もし兵士達の協力が無ければ自分と同じ考えを持つ者達を連れて自分達だけでも戦うつもりである。

「分かった。とにかく私は長門に戻る。返答は長門宛てに宛ててくれ」

この会談の後、雪下艦長は戦艦長門に戻って行った。

「桃華、悪いが各艦艇に回線を回してくれ」

「了解よ」

数秒後、各艦艇に回線が回った。

「諸君、紅蓮崎司令である。先程、責任者と話し合った。この世界は我々の知っている世界の日本では無い。だがしかし、まだ希望はある。この世界の情勢は日本に対し技術的、外交的にも全てにおいて日本が優位な状況である事だ。諸君、我々の居た世界の日本と同じ戦争の悲劇から私は救うべきであると考えている。もし自分とは違う考えを持つ人は遠慮無く申し出てくれ。だが、自分と同じ考えを持つ者は我に続け。諸君らの返答を期待する」

数分後……

「長官、各艦艇より総旗艦と共に行動を共にする、との申し出がありました」

「了解した艦長。では、長門に信号を送れ」

「了解です」

一分後

「長官。長門より『我ニ続け』だとの事です」

「よし、艦隊の陣形を二列縦陣にする。そして長門に続け」

「了解です」

戦艦長門 防空指揮所

防空指揮所に四人の少女達が新生連合艦隊を見ながら色々意見を述べていた。

「なあ、あの信濃と言う戦艦、ヤケにでかいな」

「こう言うのは長門型戦艦二番艦陸奥の艦魂の陸奥である。」

「ああ、あの様子だとうち等と同じ46cm主砲を搭載しているな」

彼女は三番艦伊予の艦魂の伊予である。

「それにしてもヤケにさっぱりしている。それにあの発射管らしきものは何だ？」

「こう言うのは四番艦淡路の艦魂の淡路である。」

「まあ、とにかく味方であったのが嬉しいね」

彼女は一番艦長門の艦魂の長門である。

そんな時、防空指揮所の一角で光出した。艦魂が持つ能力の一つ転位である。そして光が収まると信濃が現れた。

「初めまして皆様。私は日本国防海軍総旗艦信濃であります。よろしく願います」

そう言うと四人に敬礼した。そして四人も敬礼で返した。

「初めまして信濃。私は連合艦隊現旗艦長門です。こちらこそよろしく願います」

「同じく陸奥です。よろしくね信濃」

「同じく伊予だ。よろしく頼む」

「同じく淡路だ。よろしくな」

自己紹介の後に握手をした。その後、長門以下大日本帝国海軍の艦艇、新生連合艦隊は呉軍港に凱旋した。そして歴史を変えるため彼らは大日本帝国軍の一員として戦う。あの悲劇を引き起こさないために……

第八話 明かされた真実（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第九話 天皇との会談そして……（前書き）

今回の話は零戦先生の作品を許可を取って参考にしました。悪
しからず。

第九話 天皇との会談そして……

一九三五年五月二十五日 大日本帝国領帝都東京

新生連合艦隊がこの世界にタイムスリップしてから十日が経過した。この間、紅蓮崎達は各戦隊の司令官を呼び会議を重ねた。話題となったのは特にこの世界の技術力である。事実の九六式艦上戦闘機を遙かに超える九五式艦上戦闘機、事実で世界各国の国々でライセンス生産されたボフォース社の40mm機関砲をそのままの性能を維持しつつ小型化に成功する等、事実以上の技術力を誇っている。

しかし変わらないのは日本陸軍に蔓延する精神論、日本海軍に蔓延する大艦巨砲主義である。いくら高性能な兵器でも上層部の理解が無い事にはフルに性能を發揮できない。そこで話し合われた結果、陸海軍の改革である。だが妨害もあり得る。そこでとある人物の協力を行うため帝都へと向かった。その人物とは大日本帝国の元首にして陸海軍の総司令長官である天皇陛下である。

早速、雪下艦長を通して天皇陛下との会談を求めた。この電報に天皇陛下は少し悩んだが新生連合艦隊の最高責任者を連れてくる事を条件にこの皇居に呼ぶことにした。この報告を受けた紅蓮崎は姫崎達と共に東京へと向かった。

皇居の一角に有る会議室

「君達が未来から来たと言う日本人だね？」

会議室の中に有るイスに座っている昭和天皇が紅蓮崎達に問いか

けた。

「はっ、その通りであります陛下」

代表して紅蓮崎が立ちあがり敬礼した。

「うむ。早速だが質問するぞ。君達の居た世界の日本はどうなっているのだ？」

昭和天皇は紅蓮崎達に問いかけた。

「これから説明します。少し時間を下さい」

そう言うつと後方に待機していた姫崎、神崎、東雲はプロジェクトの準備を行った。そして数秒後、プロジェクトで紅蓮崎達の居た世界の昭和一〇年から昭和二〇年、そして現代にまでを詳しく分かりやすく説明した。

「……そうか、日本は敗戦したのか。だが、終戦後の発展は著しいな」

昭和天皇は終戦後の高度経済成長期を高く評価した。

「陛下。お願いがあります」

「何だかね紅蓮崎よ？」

「では申し上げます。我々の後ろ盾になって下さい！」

紅蓮崎はストレートに言うつと頭を下げた。これに慌てながらも姫

崎達も頭を下げた。

「お願いします陛下！この世界の日本を我々の居た日本の二の舞にさせたくありません！どうか、お願いします！」

天皇陛下は真っ直ぐとした眼差しで紅蓮崎達を見てこう言った。

「君達の言う事は分かった。私でよければ君達の後ろ盾になろう」

「ほ、本当ですか！？あ、ありがとうございますッ！」

紅蓮崎は驚きしつつも昭和天皇に最敬礼をした。続き姫崎達も最敬礼をした。

「うむ。君達の事を信頼して私からお願い事があるのだが聞いてくれるか？」

「もちろんです陛下」

「実は私のある娘がいてな。その娘は『自分も帝国軍の一員だ』と言って独断で自分専用の親衛隊を作り上げては他の兵士と共に訓練を行っているのだ。私はその娘を戦いで失くは無いと説得したが聞く耳を持たないのだ」

意外な事だった。紅蓮崎はまさかと思った。そのまさかが昭和天皇の口から発せられた。

「そこでその娘達の部隊を君達の指揮下に置くと考えたのだ」

「ま、待ってください！？ど、どついう事ですか！？」

「落ちつけ紅蓮崎よ」

「す、すみません陛下」

「気を取り直してだが。その娘は私の妻、香淳皇后の一人娘である
西條宮真理奈さいじょうのみまじな内親王である」

完全に四人は思考が停止した。当たり前だが紅蓮崎の居た世界ではそのような内親王は存在しないからだ。

「とにかくその娘の部隊の指揮を頼むぞ。これは勅令だ」

勅令と言われれば紅蓮崎達は拒否できない。

「分かりました。その任務、受け入れます」

「ありがとう紅蓮崎よ。早速だがその娘にあつ『いますよ、お父様
えっ……』」

突然、後ろから声が聞こえ振り向くと、そこにはまるで黒曜石の様な艶やかな腰まで伸びているロングの黒髪に、顔立ちは絶世の美女と言われる程美しく、何よりも破格な胸元を持ち合わせるまさにアイドル顔負けの彼女こそ昭和天皇の一人娘、西條宮真理奈内親王である。ちなみに彼女の服装はなぜか紫色の飛行服である。

「真理奈。またか……」

昭和天皇にとっては最早慣れた光景であるが、紅蓮崎達は状況が分からなかった。

「陛下。これはどういう事ですか？」

「ああ、言い忘れていたが真理奈は自分を指揮官とする航空隊、大和撫子旋風隊を率いているのだ」

「おやお父様？あちらの方々は？」

真理奈は紅蓮崎達を見て言った。

「ああ、彼らは未来から来たと言う日本人だ」

「へえ。あなた達が。あ、申し遅れました。私は西條宮真理奈です」

「初めまして自分は紅蓮崎海斗海軍中将であります」

「同じく姫崎桃華海軍少将であります」

「同じく神崎華凜海軍少佐であります」

「同じく東雲朱凜海軍少佐であります」

紅蓮崎達も自己紹介の後握手をした。

「それでだが、真理奈。実は君達の部隊を彼らの艦隊の指揮下に置く事が決定した」

「そ、それって!?!」

「真理奈の安全を考えて最も安全な彼らの艦隊の指揮下に置く事が

決定した。聞いてくれるよな？」

昭和天皇は鋭い眼光をしながら言った。

「…分かりましたお父様。そう言う事で皆様、よろしくお願いします」

そう言うのと紅蓮崎達に敬礼した。紅蓮崎達も敬礼を返した。

「そう言う事で明日にでも君達の艦隊に大和撫子旋風隊専用の航空母艦を遣わすつもりだ」

「えっ！？専用の航空母艦ですか？」

紅蓮崎はまたもや驚いた。日本海軍に秘匿で航空母艦を保有している事に驚きを隠せない。

「ああ、ワシントン、ロンドン両軍縮において秘匿にしていた航空母艦、その名も凜龍りんりゅうである」

最早何も言えなくなった。この世界恐るべし。ちなみに凜龍は排水量3万2000トン、速度34ノット、搭載機数90機と言う世界標準レベルを上回る航空母艦である。

「そう言う訳で、娘を頼むぞ紅蓮崎」

「分かりました陛下」

こうして新生連合艦隊に航空母艦と大和撫子旋風隊が加わった。

第九話 天皇との会談そして……（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第十話 改革始動

天皇陛下の協力と言う強い後ろ盾を付けた紅蓮崎達は早速改革を始めた。

まずは適材適所、つまり人員移動を行う事だった。

この世界の軍人の育成システムは事実とは大半が違つたため事実よりはマシな方だったが念の為陸軍からは戦略性には欠けるが中隊司令等の前線に立つ方が良い辻正信つしまさのぶ中佐を関東軍から内地の第二師団第三中隊司令に就任させ、事実ではインパール作戦で数万の将兵を死に追いやつた牟田口廉也むたぐち れんや少将はこれも関東軍から内地の第三師団第三大隊司令に就任させた。

海軍からは栗田健男くりた たけお大佐を水雷学校教頭から海軍兵学校教頭に、
永野修身ながの おさみ中佐を軍事参議官から軍令部第一部第二課、つまり教育・演習等を担当する役職に就任させた。

さらに予備役になつていた堀悌吉ほりさだよし中将を復職させた。

軍備計画においてはとある人物と会談するために紅蓮崎はある場所へと向かつた。

とある料亭の一角

「初めまして加藤軍令部次長殿」

とある部屋に着く早々あの部屋にいた男に挨拶した。

紅蓮崎の言った加藤の性を持ち現在軍令部次長をやっている人物とは只一人、加藤隆義中将である。

加藤隆義中将と言えば『アドミラルステイツマン』若しくは『世界を明るく照らす偉大なるロウソク』と言われた加藤友三郎大将の養子で艦隊派の最前線に立ち、終始軍事参議官の役職にしていた男である。

「ふん、お前がああ未来とかいう所から来た海軍軍人か」

当の本人は胡散臭い視線を紅蓮崎に浴びせた。

「そうですね、加藤中将」

「なら一つ聞こうではないか。この先の日本はどうなるのだ？」

それなら、と加藤は鋭い視線をしながら質問した。

それに紅蓮崎はこの先の事を本を用いて詳しく丁寧に説明した。

「……そうか。あのおちっぽけな航空機が戦艦を沈める。何とも滑稽な事だろう……」

加藤にとって衝撃の連続だった。何よりも終戦後のあの昭和天皇とマッカーサー元帥のツーショット写真は強烈なインパクトを持っていたから無理は無い。

それに世界最大最強だと考えていた戦艦がたった数十の航空機の波状攻撃で沈む事も艦隊派に属していた加藤にとっては衝撃だった。

「それで私に何の用で来たのだ？」

加藤は紅蓮崎に何故自分の所に来たのか聞いた。

「加藤中将。今、私達に協力すれば軍令部次長から第二艦隊司令長官いや活躍次第では軍令部総長にもさせます。一応言っておきますが、自分達の後ろには陛下が居ます。どうですか？私達と共に同じ道を進みますか？それともこのままで終わりますか？二つに一つです」

加藤は深く考えた。彼らに協力すれば自分の才能をフルに発揮できる役職に就任できる。そう考えた加藤は紅蓮崎達に協力する事を承諾した。

「分かった。私でよければ協力するよ」

「あ、ありがとうございます加藤中将」

二人は固く握手した。

この会合が後に強力な艦隊整備計画に繋がって行く事は後の話。

八月二十五日 和歌山県和歌浦湾

新生連合艦隊は和歌浦湾の沖合に錨をおろしていた。その中には三か月前に編入した凜龍と護衛の軽巡夕張、駆逐艦四隻が居た。なぜ夕張が居るのか？その理由は至って簡単。夕張は何と昭和八年、一九三三年に訓練中、操艦を誤って暗礁に座礁、その際に艦首から

一番主砲までが切断されてしまった。しかも弾薬庫に引火、誘爆しさらに二番主砲、そして艦橋までもが吹き飛んでしまうと言う大惨事を引き起こしてしまった。そのため海軍ではこの夕張を解体してしまおうと民間の造船所に前方部が殆ど無い夕張を運んで解体を委託した。そこで某造船所はこの夕張を好きにしても良いと考えたのか勝手に改良を始めたのだった。変更内容は以下の通り。

- ・全長は138.9mから155.5mに伸ばした。

- ・武装は三年式14cm単装主砲二基、同連装主砲2基から三年式60口径15.5cm連装主砲2基、同3連装主砲2基に変更。主砲配置は同じ一番、四番に連装、一番、三番に3連装の配置となっている。

- ・魚雷発射管は八年式53.3cm連装魚雷発射管2基から一〇年式61cm3連装魚雷発射管4基に変更。

- ・高角砲は一〇年式12cm単装高角砲1基から九四式12.7cm連装高角砲4基に変更。

- ・対空砲は40mm4連装機関砲4基16門、30mm単装機関砲8基8門を追加。

- ・艦橋は高雄型重巡洋艦の様な大型化にし、通信性能を強化。

- ・機関部を艦本式専燃缶8基から10基、主機を技本・三菱パースンズ式オートギヤードタービン4基から艦本式オートギヤードタービン4基に変更。

- ・軸数は3軸から4軸に変更。

・軸馬力5万7000馬力から8万7000馬力に向上。

・軸馬力の向上による速度は35.5ノットから39.2ノットに上がった。

・航続距離は14ノットで5000海里から14ノットで6500海里に向上。

・排水量は2890トンから5350トンに上昇。

・カタパルトを1基追加。それに伴って水上機を2機を搭載。

・最新鋭の機銃射撃指揮装置及び高射装置の追加。

等々改良点はどこにもない程船体に改良を施し昭和九年、一九三四年に再竣工したのであった。これに驚いたのが日本海軍の上層部である。まさか民間の造船所がこの様な性能を誇る艦艇を改良とはいえ作る事が出来るとは思ってはいないからである。

だが、この夕張は海軍が好きにしてもよいと言ってしまう、今更手のひらを返してこの夕張を貰う事はとてもではないが出来ない。

追い打ちをかけるかのように現れたのが秘匿にしていた凜龍である。何とこの夕張を皇室が買い取ると言う前代未聞の出来事が起こった。しかも勅令で買い取ることであるため海軍上層部は夕張を諦めた。

そのため第一防空艦隊旗艦として新しい運命を辿ることになったのである……話を戻す。

そんな多忙の経歴を持つ夕張の上空を五機編隊の大和撫子旋風隊の九五式艦戦が飛行していた。この大和撫子旋風隊専用の九五式艦戦の尾翼には部隊のエンブレムである旋風と撫子の花のマークが描かれている。

先頭を飛行する真理奈の九五式艦戦の胴体にはエックス字の紫の線が二本が描かれている。

「さすが九五式だね。これまでの戦闘機よりも遙かに優れている」

真理奈は操縦席の中でそう呟いた。ちなみに九五式艦戦の操縦席は事実よりも少し大きい位で、後は電子機器や防弾装甲に充てられている。

真理奈は後方の九五式艦戦を見た。いずれも実戦経験は無いが、操縦の腕はベテランに匹敵する程のベテランパイロットである。

彼女達は訓練時間を終え、凜龍に着艦していった。そして真理奈の番となった。着艦灯の赤と青のランプが一直線になる様に機体の左右と高低を調整する。九五式艦戦の視界は良く、操縦も素直で修正は極めてスムーズに行える。飛行甲板に張られた三番目の着艦索に目標を定める。

キキッ！ガツチャン！

見事、目標通り三番索を捉えて着艦した。そして機体をエレベーター上まで進ませると発動機を停めた。その後、エレベーターによって格納庫へと下がって行く。

「ふう〜っ。本日も終わった終わった」

九五式艦戦から降りた真理奈は大きく背伸びをした。

「隊長、本日もお見事でした」

大和撫子旋風隊副隊長を務めている笹原美樹ささはり みき海軍大尉が寄って来た。ちなみに真理奈の階級は海軍少佐だが、将官並の優遇を受けている。

「あなたこそ前よりもうまくなっていますよ」

「ありがとうございます隊長殿」

笹原は真理奈に敬礼した。

「では、明日に備えて休みなさい」

「はっ、了解しました」

笹原はそう言うつと居住区へと向かっていった。

「…さてっ、と」

そう言うつと自分も更衣室で飛行服から普段服に着替えると自分の部屋へと向かった。

「はあ〜っ、疲れたっ」

自分の部屋の前に着くと、何故か自分の部屋から話し声が聞こえ

た。

そつと耳を近づけてみると中から女性の声だった。

言い忘れていたがこの凜龍は女性専用艦なので全員女性で構成されている。

少し話をずらすと女性が軍人として起用するという考えは第一次世界大戦後から始まった。日本は仮想敵国であるアメリカに工業力や人材等で大きく劣っていた。

そこで女性も軍人として育成すれば色々と問題が解決する。

しかしその道は苦労の連続だった。第一、当時の日本は『男は外女は中』と言うように家制度が存在しており一筋縄にはいかなかった。

そのため制限付きで女性軍人が誕生したのは何と昭和七年である。

つまり現在いるのは今年卒業したばかりの新米ばかりである……話を戻す。

「おかしいですね？」

確かめるためにドアを開ける。

部屋の中には二人の軍服を着た少女が居た。

「…誰ですか？」

真理奈が尋ねると二人はこう言った。

「私はこの凜龍の艦魂、凜龍です」

「そして私は夕張の艦魂、夕張です」

一瞬、水を打ったかのような静寂が部屋を包み込んだ。

「艦…魂…ですか？」

真理奈は恐る恐る二人に聞いた。

「はい。その通りです殿下」

「信じられない……」

当然と言ったら当然である。だが、天皇家の血を受け継いでいる真理奈はそう言う能力が自分にもあるかもしれないと考えた。

「分かりました。私はあなた方を信用します」

二人は真理奈に頭を下げた。

「「信じて貰えてありがとうございます殿下」」

「これからもよろしくね二人とも」

第十話 改革始動（後書き）

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

第十一話 変えゆく歴史(前書き)

第十一話 変えゆく歴史

九月二十六日 呉海軍工廠のドック

この日事実で言う第四艦隊事件が起こった日である。第四艦隊事件とは九月二十六日に岩手県沖で第四艦隊は演習中、台風に遭遇した。普通なら台風や激しい波浪にも耐えきれないように設計されているはずの軍艦なのだが、何と最新鋭の吹雪型駆逐艦二隻が大波の影響で艦首が切断され、沈没寸前の大破。金他にも駆逐艦四隻の艦橋が大破し、重巡妙高、最上、空母龍驤も船体を損傷する大惨事となった。

理由としては、当時日本海軍は個艦優勢主義こかんゆうせいしゆぎに凝り固まっていた。そのため日本軍艦艇は重武装化が最優先されていた。そのためどうしてもトップヘビーになりがちで、船体はバランスを欠き復元力不足となってしまう。そのため荒天では転覆の恐れもある。また重武装の分、船体そのものの資材を軽量する必要があり、船体強度をある程度犠牲にしなければならぬ。さらにまだ技術的に問題のあった電気溶接工法を多用したことも一因となっている。これが波浪に耐えきれない脆弱な艦艇を建造してしまった。

慌てた海軍当局は、建造中の艦艇の設計を全てやり直させた程で、また就役中の艦艇もドック入りさせて艦艇を強化する改良工事を行った。このため海軍の艦隊整備計画はかなり遅れた。

だが、そのおかげで台風に強い艦艇となつて、逆にハルゼー艦隊の艦艇はそう言う改装工事は当然行っていないためハルゼー台風によって駆逐艦が転覆すると言う事が起こった。

しかしこの世界の日本海軍艦艇は設計の中でトップヘビーを一番考慮した艦艇を建造しているため問題無かった。それでも念の為ドック入りさせ、検査させている。そして最初に戻る。

この一番ドックには竣工したばかりの最新鋭の最上型軽巡洋艦一番艦の最上が鎮座していた。もちろん、この世界での性能は違う。以下の通り。

全長 225.5m
全幅 21.5m
基準排水量 1万3750トン
満載排水量 1万8200トン
最大速度 35.2ノット
航続距離 18ノットで8000海里
機関出力 18万7000馬力
武装 三年式65口径15.5cm3連装主砲5基15門
九四式50口径12.7cm連装高角砲6基12門
九〇式61cm3連装魚雷発射管4基
九五式40mm4連装機関砲8基32門
九五式30mm3連装機関砲12基36門
九三式13mm連装機関銃4基8門
水上機 4機

カタパルト 呉式二号五型空気式射出機2基
姉妹艦 二番艦『三隈』、三番艦『鈴谷』、四番艦『羽黒』

「ふむ、こうして見ると中々の艦艇ではないか」

ここには新生連合艦隊の代表として紅蓮崎重工業現総帥、紅蓮崎剎那海軍少佐がもう一人の海軍軍人に向かって言った。

「そう言われますと我々も建造した甲斐があります」

「こう言うのは事実よりも早く艦政本部部長に就任した岩村清一海軍少将である。（事実では昭和十二年）」

「この最上型は後に20.3cm主砲搭載の重巡洋艦になります。そのため軽巡洋艦にしては余裕のある設計をしています」

確かに軽巡洋艦にしては重武装しても尚設計に余裕がある程だった。

「あなた方の居た世界で言う第四艦隊事件は我々の世界では本日まで聞いていましたが…」

「ああ、だからこうしてチェックに入っているのでは無いか？」

「はい。我々としても脆弱な艦艇は建造したくはありませんから」

岩村本部長は堂々として言った。ちなみに二番ドックには最上型軽巡洋艦二番艦の三隈、三番ドックには妙高型重巡洋艦一番艦の妙高、四番ドックには龍驤型航空母艦一番艦の龍驤が鎮座していた。

「そう言えばマル3計画についてだが」

急に話を変えてきた事に多少驚いたがすぐに返答した。

「確かにマル3計画なるものを我々は計画していますが、それがどうしましたか？」

「実は色々と問題点が発覚してな。建造計画の修正を考えてほしいんだ」

「…どう言う事ですか？」

「取り敢えず話は艦政本部にで。一応、提案書もあるから」

「…分かりました。話を聞きましょう」

一時間後 艦政本部部長室

「では、お座りください」

「分かった」

刹那は座ると早速岩村部長が口を開いた。

「早速ですが、提案書を」

「了解した」

そう言つと提案書を岩村部長に渡した。

ここで提案書に書かれてある建造計画をここに記しておく。以下の通り。

戦艦 七隻

航空母艦 三十隻

重巡洋艦 十二隻

軽巡洋艦	十二隻
駆逐艦	七十二隻
海防艦	三十二隻
潜水艦	四十二隻
輸送艦	三十二隻
補給艦	三十二隻
工作艦	八隻
揚陸艦	四十二隻

内訳しておくとおくと戦艦七隻のうち三隻は防空戦艦、四隻はバランス型戦艦となっており、航空母艦は二十四隻中十六隻が正規空母で六隻が軽空母、八隻が輸送船団護衛用の護衛空母となっている。

重巡洋艦はこれも対艦、対空に優れたバランス型を採用しており、軽巡洋艦は六隻が電子戦術型、バランス型四隻、重雷装型二隻となっている。

駆逐艦は二十四隻が防空型、二十四隻がバランス型、二十四隻が艦隊型で、海防艦は対空、対潜に特化したのを三十二隻、潜水艦は海大型二十隻、海特型八隻、潜高型十六隻となっている。

輸送艦、補給艦については速度を早め尚且つ搭載量も優れたのを、揚陸艦は二十一隻は兵員輸送に特化した甲型、残りの二十一隻は戦車などの車輛を運ぶのに特化した乙型となっている。

「しかし戦艦が防空用のを除けば四隻とか少し寂しいではありませんか？」

大艦巨砲主義がまだまだ主流の日本海軍の軍人からすればもう少

し戦艦を建造したい所だと言う考えがある。

「よく見てください。建造するのは四隻ですがそれに搭載する主砲は51cm3連装主砲4基12門です」

岩村にとつてはまさに寝耳に水だった。

「51cm…3連装主砲を…4基だと…それでは排水量は最低でも10万トン以上はなりませんぞ!？」

「まあまあ、落ち着いて聞いてください。この世界の技術なら51cm主砲を鑄造するのも可能です。これさえ出来れば後は時間を掛けて建造すればよいのです」

「なるほど。それならこの呉は一応昭和八年に大拡張を行い、10万トンドックは丁度4つ。確かに時間さえあれば建造は可能です」

岩村はまるで希望が見えたかのように声を上げた。

ちなみにその他にも8万トンクラスのドック6つと同数の建造ドック、それに伴う資材加工工場や組立工場等も増設されている。もちろん事実よりもはるかに高性能な工業機械を揃えている。

「では、私はこれからまた巡視に出かけて来ます」

そう言うと刹那は立ちあがり再び呉のドックへと向かった。

その頃、海斗はとある人物にあうため今度は陸軍省へと赴いた。

東京に有る陸軍省

「初めまして石原参謀本部作戦部長」

石原の性を持ち、昭和一〇年現在参謀本部作戦部長に就任しているのは只一人、『帝国陸軍の異端児』と言われるほどの変わり者にして、あの満州事変を指揮した石原莞爾いしはら かんじ陸軍中将その人である。

「…お前さんか？あの未来とやらから来た日本人とは？」

やはり加藤隆義の様に疑う。

「ええ、そうですよ。証拠ならいくらでもあります」

そう言うど持ってきた鞆の中から特に自らが指揮して建国させた満州国の事を中心に、太平洋戦争の出来事を詳しく丁寧に説明した。

「何と言う事だ……」

自らが苦心して建国した満州国は僅か一四年で日本敗戦と共にソ連軍の手によって亡国と化した。何よりもこれまで無敗を誇っていた大日本帝国が太平洋戦争で敗戦する事が石原にとっては信じられない事だった。

「どうですか？これで信じてもらえてくれましたか？」

「ああ、どうやら信じるしかないようだ…なぜ、私の所に来たのだ？」

「中将。満州国の黒竜江省には南方資源地帯を遙かに超える油田が存在しています」

この発言に衝撃が走った。

「それは本当か!？」

「ええ。南方で採れる石油三年分がたった一年でそこから採れる程の量です」

「何と言つ事だ…この事は誰にも話していないのか？」

「はい。この事はあなただけにしか話していません」

「ふむ。それで満州から離れた私に何をしろと？」

「中将。よく聞いてください。今、自分達の後ろには陛下が付いています。私達と共に同じ道を歩めばあなたを満州国軍の総司令官にも就任させる事も出来ます。どうですか？」

まさに夢のような話である。

「…分かった。私でよければ君達に協力するよ」

「ありがとうございます中将」

二人は固い握手を交わした。これが後に歴史を大きく狂わせる根源になるつとは誰も知らなかった……

第十一話 変えゆく歴史(後書き)

ご意見・ご質問・ご感想をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1937y/>

異世界興国大戦～疾風怒濤！！第一独立機動艦隊奮闘記～

2011年11月24日08時52分発行